

二 善徳寺の概要

歴史・沿革について

北陸は浄土真宗と大変かわりの深い地域で、その由緒は、承元元年（一一二〇）の親鸞の越後配流といわれており、越前・加賀・越中の真宗寺院で、配流の途中で教化があったという伝承が、少なからず伝えられている。

しかし、本格的に北陸に浄土真宗が布教されるのは、本願寺八世蓮如の代以降からである。

文明三年（一四七二）、蓮如は越前の吉崎より金沢を経て井波瑞泉寺へ赴く際、祖父父巧如の弟、周覚法印が布教した旧地である加越国境の砂子坂（金沢市）を訪ねた。そして、その仏法有縁の地に道場を創建するように諭し、周覚の孫で蓮如の甥、蓮真に付属させた、と伝えられている。このことから、善徳寺では蓮如を開基とし、蓮真を第二世としている。

その後、蓮真は寺基を砂子坂から法林寺（南砺市）に移し、子の実円に跡を譲った。延徳期（文亀期）（一四八九～一五〇四）には、法林寺から山本に移り、この頃、本願寺九世実如より寺号「善徳寺」を免許された。

実円の子である第四世円勝は、天文年間（一五三二～一五五五）に福光へと移り、さらに、円勝の子、第五世祐勝の頃、城ヶ鼻の城主、荒木大膳の請をうけ、現在地である城ヶ鼻の城郭に寺を建立したと伝えられている。その時期については、諸説あるが、通説では永禄二年（一五五九）といわれている。

祐勝には男子がなかったため、越前の西光寺から空勝を婿に迎え、第六世とした。空勝は、本願寺と織田信長が戦った石山合戦（一五七〇～一五八〇）に参戦し、大変尽力した。また、石山合戦講和後、講和に反対し籠城を続けた教如を支持した。越中で力を持っていた井波瑞泉寺と伏木勝興寺は、講和派に属していた。

慶長八年（一六〇三）、教如が東本願寺を開創し、本願寺の東西分派がおこると、空勝は教如へ帰参した。この結果、善徳寺は越中において東方の最有力寺院としての地位を確立し、越中・加賀・能登の三か国に末寺、門徒をもつ中本山としての役割を果たすようになった。

また、天正一三年（一五八五）には、越中三郡は前田氏が領有することになった。

延宝七年（一六七九）成立の『由来覚書一牒』や嘉永二年（一八四九）に成立した『城端善徳寺由緒略書』によれば、慶長九年（一六〇四）に、加賀藩二代藩主前田利長が狩りの途中、善徳寺に二泊し、拝領品とともに自筆の屋敷地寄進書状を下されたと記されている。

加賀藩は、寺社政策として慶安四年（一六四八）に寺社奉行をおき、ついで、宗派ごとに頭寺（触頭）を定めることとした。

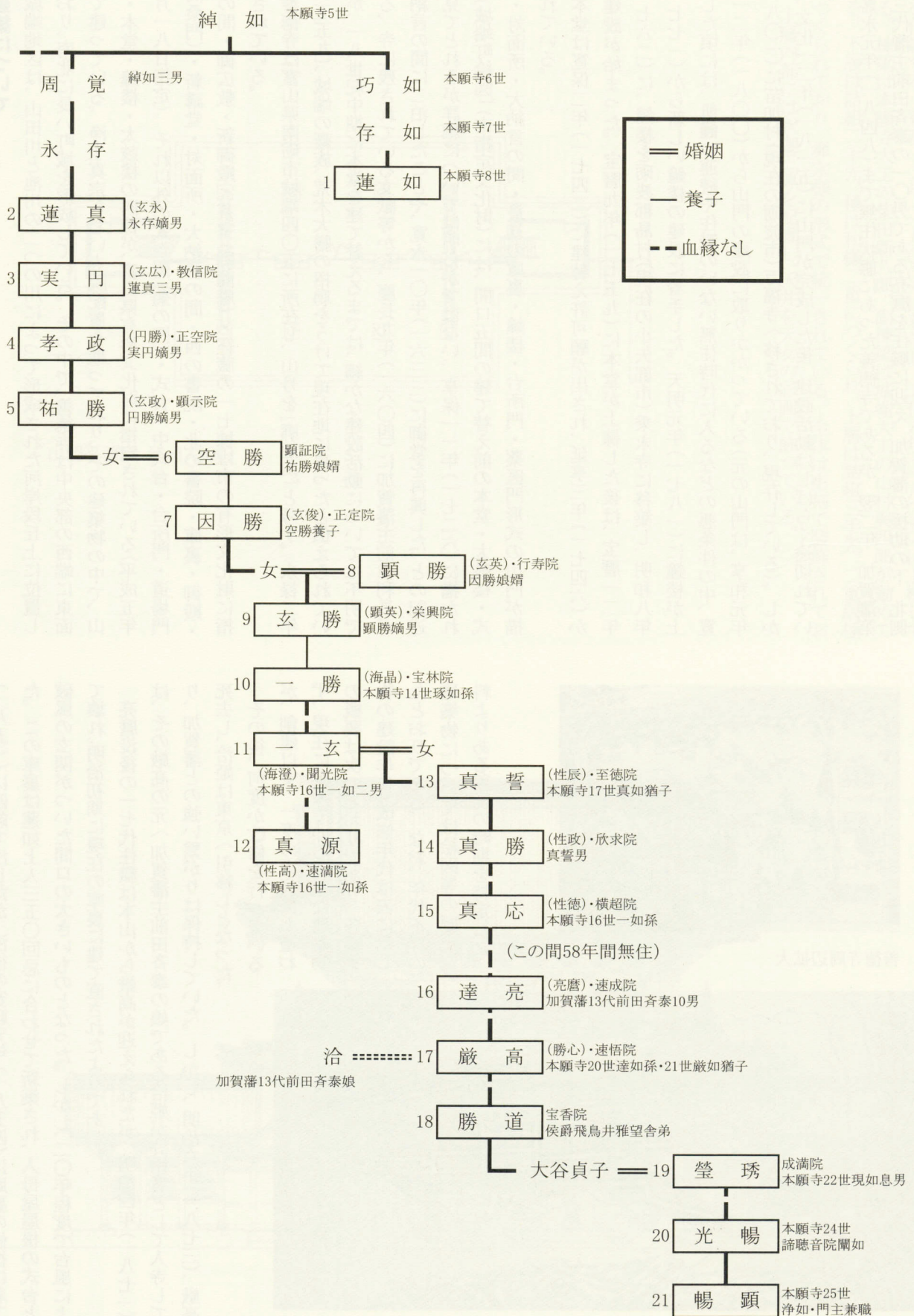
本願寺は宣如の意向によって、寺法に関する「申触」を善徳寺と慶安二年（一六四六）に東方へ帰参した井波瑞泉寺の二か寺に伝達することとし、これに倣い、加賀藩もこの二か寺に「頭寺（触頭）」を伝達することとした。これ以降、善徳寺と瑞泉寺が国法・寺法の両法について、越中四郡の東方二七二か寺の頭寺となる体制が確立した。

この後、近世中期の善徳寺は、歴代住職が本願寺宗主親族から就任しており、寺勢の安定期を迎えた。本堂造営や鐘樓の竣工など大事業が行われ、御坊としての地位を確立した。

しかし、第二五世真応（本願寺一六世一如の孫・一七九一年没）の後、なかなか後継が決定しなかった。加賀藩三代藩主前田斉泰は、嘉永元年（一八四八）に誕生した一〇男の亮五郎について善徳寺入寺の意向を表した。亮五郎は本願寺二〇世蓮如の猶子となり、名前を亮磨と改め、嘉永二年（一八四九）に第一六世住職として入寺した。亮磨は入寺後も、藩主実子として藩からの援助を受けていたが、嘉永四年（一八五二）に四歳で没した。その後、明治四年（一八七二）には、亮磨の妹、治姫が第一七世嚴高の室に縁辺相整い入興するなど、前田家との関係は保持している。

近世後期の善徳寺は、住職が決定しない時期が長くあったが、五か寺と呼ばれる五つの下寺（真覚寺・恵林寺・伝栄寺・龍勝寺・浄念寺）が寺務や儀式に深くかわり、善徳寺を運営していた。五か寺は、寺家、役僧、列座、寺中、看坊、役寺とも呼ばれ、住職が在中のときは役僧として働き、住職が留守、または、無住のときには看坊として、寺法と国法の二つの事務や様々な案件の取りさばきを行った。

明治期に入ると、六年（一八七三）、「御坊」が管利に改称され、城端管利となった。また、九年（一八七六）には、「宗規綱領」により、「管利」が「別院」と改称され、現在に至っている。



諸建築について

城端地区は、山田川と池川の二つの川によって形成された河岸段丘上に位置しており、南北に長い町域を形成している。その中で、善徳寺は中央部の西端に東面して建っている。浄土真宗らしい寺院配置を取っており、その建築物の中で、山門・本堂・鐘楼・太鼓楼の四棟が、富山県有形文化財に指定されている(平成五年八月一八日指定)。それ以外の式台門(菊の門)・式台・中式台・台所門・道場門(高桑門)・新講堂・対面所・大納言の間・西の書院・北の書院・庫裏・御殿・竹の間・御広敷・新御殿・茶室(廓龍庵)・経蔵の一七棟は市の有形文化財に指定されている。

善徳寺は富山県南砺市城端四〇五に所在し、山号を「廓龍山」と号す。永禄二年(一五五九)、城端の豪族、荒木大膳の招聘をうけて現在地に移ったと伝えられているが、一八世紀中期に本堂を建て替えるまでは、細かな建設活動については不明である。寺に残されている文献等から、慶長九年(一六〇四)に加賀藩主前田利長が大納言の間に二泊したことや、寛永一〇年(一六三三)に御堂を再興した、との記述が見てとれるが詳細については明らかではない。享保二年(一七二六)に描かれた「城端町絵図」(市指定文化財)には、間口五間の建て替え前の本堂・太鼓楼・式台・対面所・大納言の間・最初の庫裏・鐘楼・台所門・薬医門形式の山門が描かれている。

本堂は寛保二年(一七四二)に建替え許可願が出され、延享三年(一七四六)から建設が始まった。宝暦九年(一七五九)に本堂が上棟した後は、宝暦一二年(一七六二)に、鐘楼を砺波郡島村(現在の小矢部市)乗永寺に移築し、明和八年(一七七二)から新しい鐘楼の建設に着手した。天明元年(一七八一)に鐘楼が上棟した頃には、飢饉の連続や住職のいない無住時代に入るなどの悪条件の中、寛政一二年(一八〇〇)から山門の建設に取りかかっている(元の山門は、享和元年(一八〇一)に苗加村(現在の砺波市)万福寺へ移されており、現存している)。しかし、文化一二年(一八一五)に山門が完成した後、建設活動はしばらく途切れている。

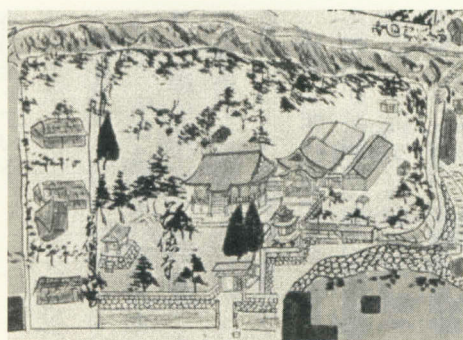
嘉永元年(一八四八)まで無住状態にあった善徳寺であるが、翌二年、加賀藩第一三代藩主前田斉泰の一〇男である亮麿を住職に迎え、加賀藩の援助の下、北側に寺地を広げ、式台門や御殿、御広敷などの居住部分を拡充した。亮麿は嘉永四年

(一八五二)に四歳で没したが、没後の安政元年(一八五四)に庫裏の修復に着手した。この庫裏は蓮如上人三五〇回忌に合わせて新築され、入母屋屋根の式台と唐破風の玄関がついた間口の大きいものとなった。しかし、二〇年程度で台風によって壊れ、明治初期に現在の庫裏に建て直されたようである。

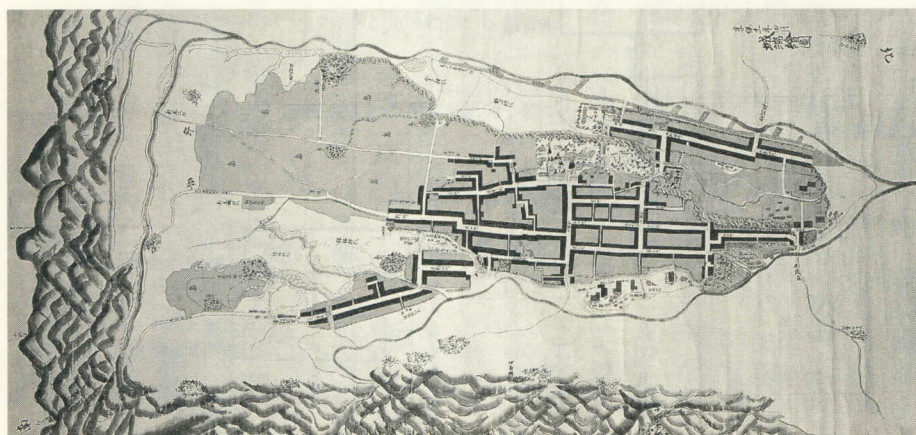
亮麿没後の一七代住職は本山から厳高が迎えられたが、明治四年(一八七二)には、その厳高の元へ加賀藩主前田斉泰の娘である治姫が許婚者として入寺しており、加賀藩との強い繋がりは保持していた。しかし、明治六年(一八七三)、厳高が死去し、治姫は東京へ引移りとなった。

その後、何度か改修を行っている

が、創建以来、一度の火災にも遭わず、現在に至っている。主な建築物の概要は次のとおりであり、各建築物の建設年代・改修年代は表に示したとおりである。なお、年代不詳の建築物については絵図等の歴史資料よりある程度の時期を特定した。



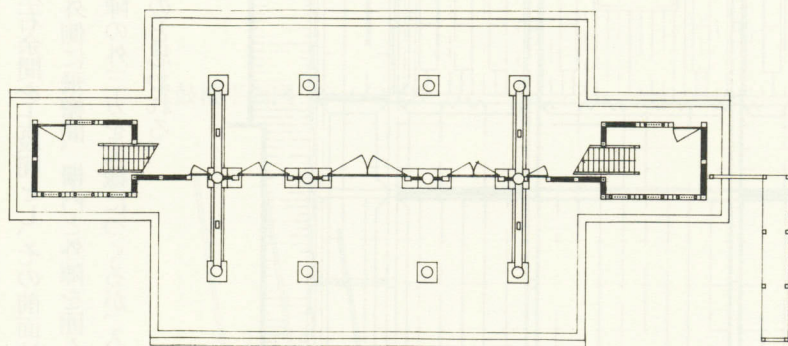
善徳寺周辺拡大



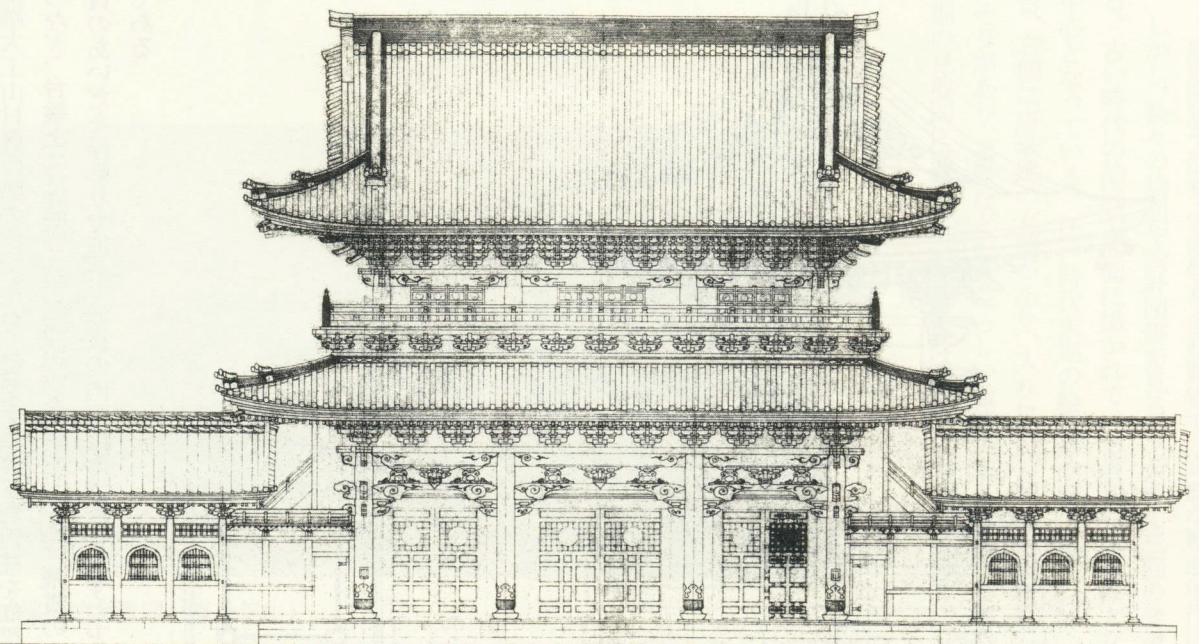
「城端町絵図」(享保11年製)

山門

三間三戸の二重門で、入母屋造の建造物である。本瓦葺で左右に山廊を付属する。寛政二年（一八〇〇）に着手し、文化六年（一八〇九）に上棟している。棟梁は本願寺大工の柴田新八郎、副棟梁は城端大工の山村與四郎が勤めている。下層は詰組二手先、極は和様二重につくられ、上層は詰組二手先、二重扇極でつくられており、禅宗様の形式で統一されている。全体は彫刻で装飾されており、上層内部には釈迦三尊を配置し、天井を天女の彩画で飾っている。



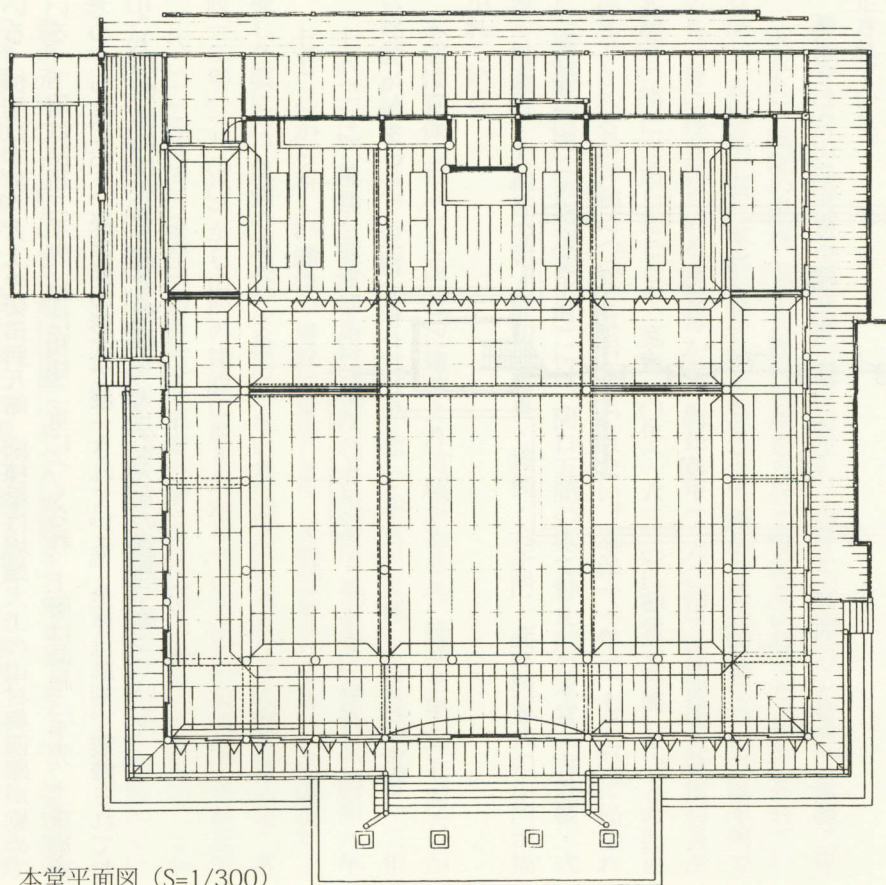
山門平面図 (S=1/300)



山門正面 立面図

本堂

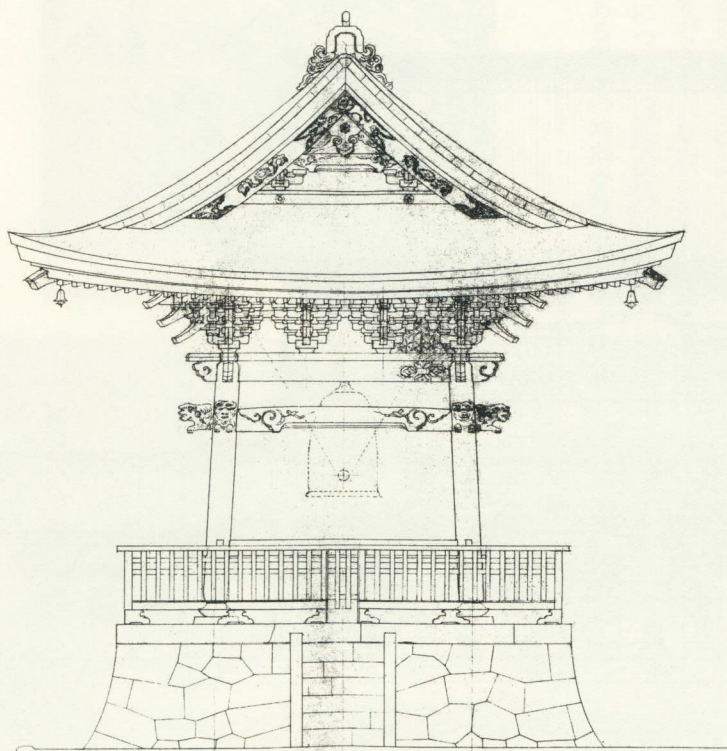
宝暦九年（一七五九）に上棟し、単層入母屋造、棧瓦葺で東面して建つ。正面中央に三間の向拝を備える。平面構成は真宗寺院の大型本堂の通例に準じており、内陣と左右余間を上段間とし、その前面は柵内を介して広い外陣に区分している。余間の外側に飛檐間、柵内と外陣を囲んだ三方に一間通りの入側縁を廻す。通常では外陣の外三方を広縁につくるが、入側縁にしたのは、当地の冬季の風土を反映したものと思われる。



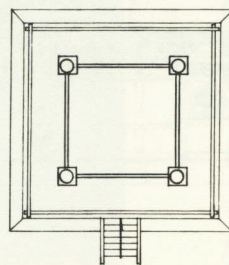
本堂平面図 (S=1/300)

鐘楼

入母屋造、銅板葺で、切石で組まれた基壇の上に建ち、方一間の禅宗様の建造物である。天明元年（一七八二）に上棟しており、加賀藩大工横山権守の設計で、城端大工山村與四郎の作である。礎盤上に建った円柱を虹梁仕立の飛貫と頭貫でつなぎ、台輪上には詰組三手先の組物を組んでいる。飛貫の木鼻は獅子、飛貫と頭貫のあいだを浮彫りで埋め、頭貫の内面に彫地紋を施すなどの華美な装飾が特徴である。



鐘楼南側立面図



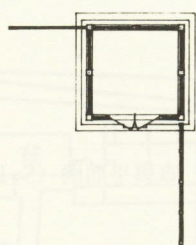
鐘楼平面図 (S=1/300)

太鼓楼

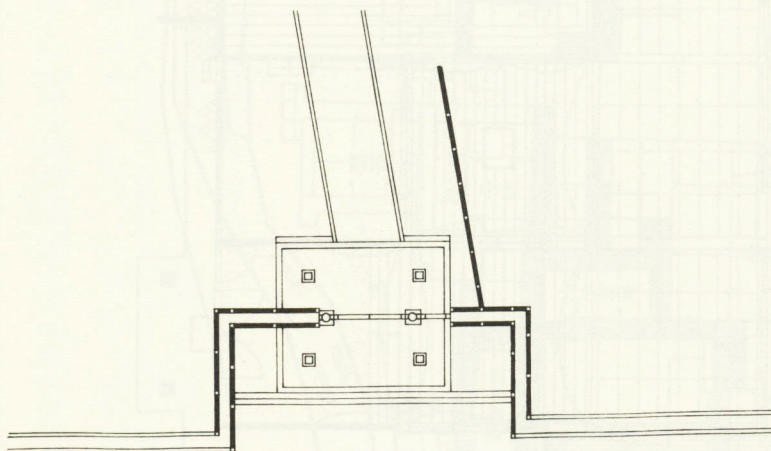
善徳寺の建造物の中で最古のものと伝えられており、享保一二年（二七二六）の「城端町絵図」では、現在の式台門の位置に描かれている。その後、嘉永三年（一八五〇）に式台門が新築された際、現在位置に移築された。簡素な形式の宝形造、銅板葺で、方二間の下層と方一間の上層からなる重層の建造物である。楼上には大太鼓を備え、毎朝、夕に叩いて時刻を知らせた。

式台門

入母屋唐破風造、銅板葺の四脚門で、加賀藩主の子息、亮麿入寺の際に建造された。棟梁は能登の大工藤田長五郎が勤めた。東本願寺勅使門に模して造られ、門扉に菊花の飾りが付いていることから「菊の門」とも呼ばれている。彫刻は本山派遣の彫刻師金剛寺屋利八で、大変緻密な彫刻が施されている。



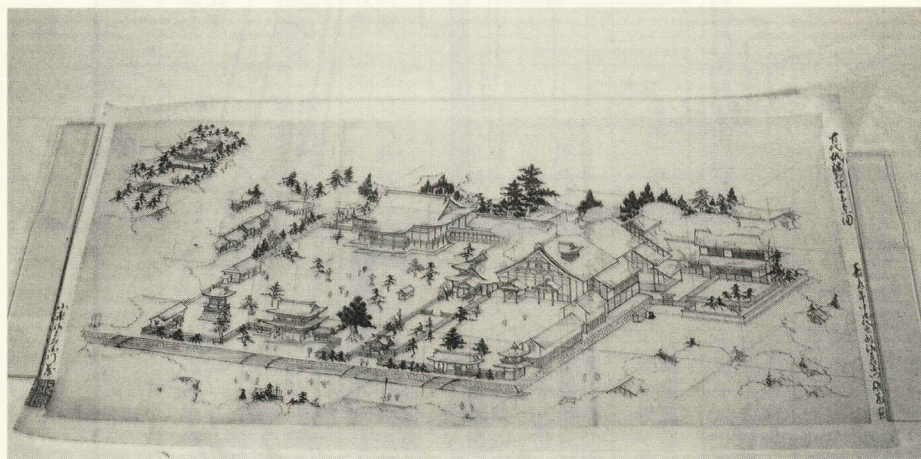
太鼓楼平面図 (S=1/300)



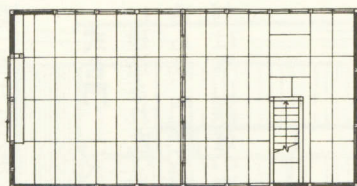
式台門平面図 (S=1/300)

庫裏

厨房設備・僧寮・客室等を含む建物で、正確な建造年代については不明である。しかし、数々の絵図や設計図等を見ると、大きく三回の変遷があったと考えられる。古い時代の絵図や図面に描かれている最初の庫裏は入り口が一箇所、で台所が中心となっている。江戸時代末期の絵図や図面に描かれている庫裏は、左側に式台、右側に唐破風の玄関があり、入り口が二箇所ある規模の大きいもので、屋根にそりがあり、幕股などの寺院らしい装飾が施されている建物である。しかし、明治期の見取図に描かれている庫裏は現在のもので、入り口は一箇所、で装飾はない。

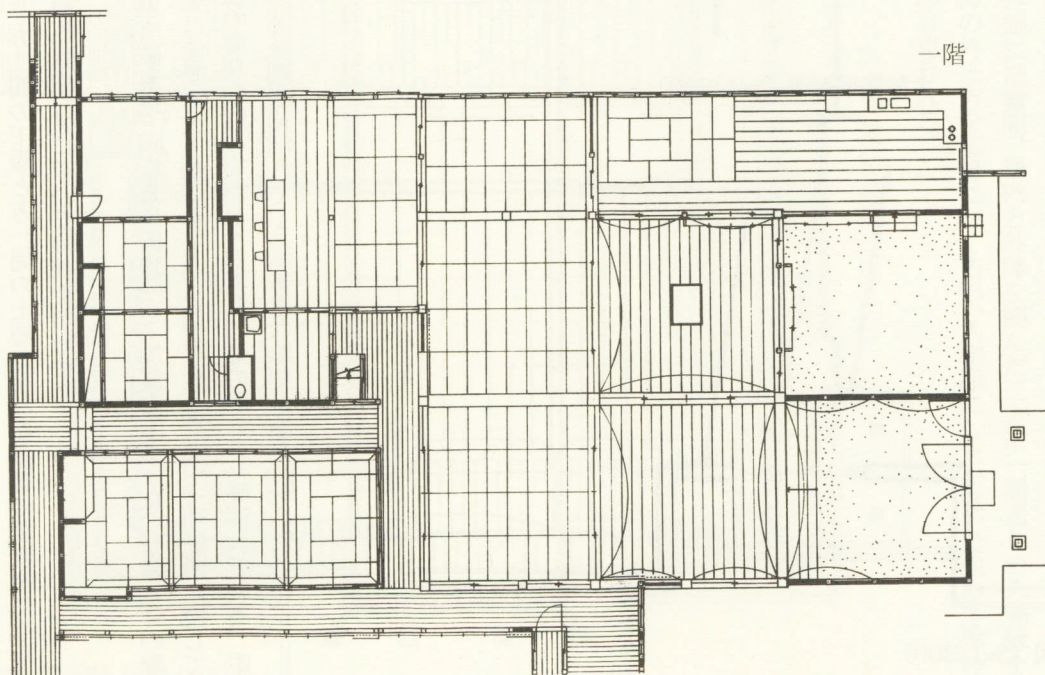


3827 城端御坊全景図（嘉永年中）



二階

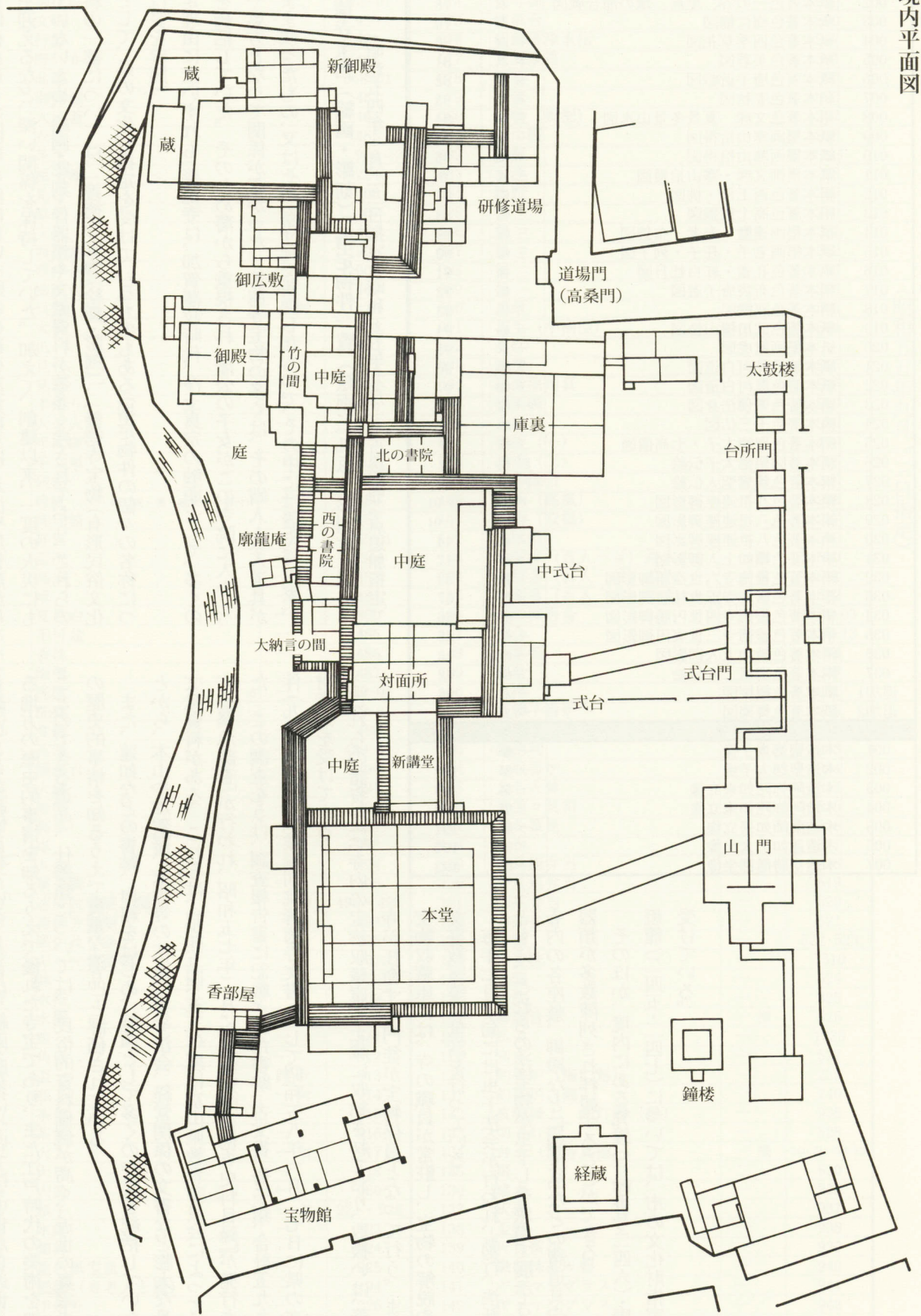
庫裏平面図 (S=1/300)



一階

・各建築物の概要一覧

道場門	経蔵	(廓龍庵 茶室)	対面所	御殿	新御殿	御広敷	式台	台所門	大納言の間	新講堂	中式台	建築
入母屋造 唐破風 瓦葺四脚門	輪蔵造重層	切妻造 銅板葺		切妻造 総桧造			入母屋造 瓦葺	平入 切妻造 棧瓦葺	張り付け壁 上下段の間 格天井	民芸調桧造	入母屋造 唐破風瓦葺	様式等
昭和二四年移築	明治二十一年 九月七日上棟	元治元年 (一八六四)完成 昭和五八年改修	江戸初期か	嘉永二年 (一八四九)		嘉永二年か	江戸初期か	江戸初期か	江戸初期か	昭和三七年八月 内部改修	明治初期	建設年代
大鋸屋の豪農高桑長兵衛の 玄関門・大正期には料亭を 妻楼へ移築されていたものを 譲受	棟梁城端大工浅野喜平・辰 次郎 左官福田屋	棟木に「元治元年五月二十 五日完成、大工 荒木重兵 衛、金百八拾両」とある	亮鷹入寺の際改築し、上下 二段、武者隠し間を備う	亮鷹入寺の際建築 請人金 屋岩黒甚四郎・大工一七九 八名(二九名ノ坪)	大正十(一九二一)年庄下 村矢木の館共右エ門より譲 り受け移築	上女中等が常駐した奥向きの 御用部屋	享保十一年(一七二六)の 「城端絵図」に記入あり 亮鷹入寺の際改築	享保十一年(一七二六)の 「城端絵図」に記入あり 江戸後期に移築	慶長九(一六〇五)年加賀 藩二代藩主前田利長が宿泊 したと伝える	江戸後期の絵図にも記入が あるが、建物自体は新しい もの	明治期の間取り図には記入 あり	備考



諸資料について

江戸時代を通じて国法・寺法において頭寺を務めた善徳寺は、本山や加賀藩から住職を迎えるなど、深い関係を保持していた。加えて、創建以来、一度の火災にもあつていないため、絵画・彫刻・什器類や文献資料が数多く残されており、これらの諸資料の一部については、「善徳寺宝物（絵画・彫刻）」、「善徳寺宝物（有形民俗文化財）」として、県の文化財指定を受けているものもある（指定物件の個々の名称については表を参照）。

指定理由にはいずれも「善徳寺は、加賀藩政時代、浄土真宗の触頭として、多くの寺院を統括していた。そのため藩から重視され、藩公の子女がこの寺院に入寺し、住職や奥方となつて関係が深かった。善徳寺宝物の多くは、その婿入・嫁入道具がそのまま残つたもの、又はその際寺院で新調したもので、その中には藩や将軍家か

・「善徳寺宝物（絵画・彫刻）」指定物件一覧（絵画三九点・彫刻七点）

（昭和五四年一月二三日指定・昭和五五年九月一二日絵画二点追加指定）

指定目録番号	名 称	員数	本書での番号
001	紙本著色観桜遊楽図	一 双	77
002	紙本著色一の谷、屋島、壇の浦合戦図	一 双	78
003	紙本著色梅に鵲図	一 双	79
004	紙本著色四季草花図	半 双	80
005	紙本著色芙蓉図	半 双	81
006	紙本著色唐子遊戯図	一 双	82
007	絹本著色春秋図	一 双	83
008	絹本著色文珠、夏景冬景山水図	三 幅	84
009	紙本墨画寒山拾得図	一 幅	85
010	紙本墨画寒山拾得図	一 幅	86
011	紙本墨画文珠・寒山拾得図	三 幅	6
012	絹本著色西王母・桃図	二 幅	87
013	絹本著色高士猿猴図	三 幅	88
014	紙本墨画達磨・寿老・布袋図	三 幅	89
015	紙本墨画老子・莊子・列子図	三 幅	90
016	絹本著色孔雀・紅白牡丹図	三 幅	91
017	絹本著色布袋唐子遊図	一 幅	92
018	絹本著色双鶴図	二 幅	93
019	紙本著色武田機山像図	一 幅	94
020	紙本墨画竜虎図	一 双	95
021	紙本著色二河白道図	一 幅	96
022	紙本著色二河白道図	一 幅	97
023	絹本著色方便法身図	一 幅	1
024	絹本著色十三仏図	一 幅	5
025	絹本著色聖徳太子・七高僧図	二 幅	8
026	絹本著色聖徳太子伝絵	四 幅	51
027	絹本著色親鸞聖人伝絵	四 幅	53
028	絹本著色八祖連座御影図	一 幅	43-01
029	絹本著色八祖連座御影図	一 幅	41-01
030	絹本著色八祖連座御影図	一 幅	44
031	絹本著色顕如上人御影図	一 幅	17
032	絹本著色善徳寺六世空勝御影図	一 幅	58
033	絹本著色善徳寺五世祐勝御影図	一 幅	57
034	絹本著色善徳寺四世円勝御影図	一 幅	56
035	絹本著色善徳寺三世実円御影図	一 幅	55
036	絹本著色教如上人御影図	一 幅	18
037	絹本著色宗祖上人伝絵	二 幅	52
追加1	紙本著色観桜図	一 点	98
追加2	紙本著色舞楽図	一 点	99
指定目録番号	名 称	員数	本書での番号
001	木造聖徳太子像	一 軀	187
002	木造聖徳太子像	一 軀	188
003	木造阿弥陀如来立像	一 軀	189
004	木造阿弥陀如来立像	一 軀	190
005	木造薬師如来立像	一 軀	191
006	木造蓮如上人坐像	一 軀	192
007	木造空勝僧都坐像	一 軀	193

ら贈られた由緒ある品物も含まれている。」とあり、「保存状態が良く、美術的水準も高い」ことが評価されている。さらに、絵画・彫刻については「中世から近世へ移る地方の歴史的事情を知るうえで優れた寺宝であり、また江戸時代美術を知ることでできる遺品、什器類については、「民俗的資料価値が高く、近世の真宗寺院の歴史的事情を知るうえで貴重な遺品」と評価されている。

また、蓮如などの書跡、由緒をはじめ、触頭として多くの寺院を統括していたことから、本山や加賀藩、末寺等の往復文書や法会、経営関係の文書など膨大な量の文献資料がある。これらは、昭和五四、五五年度に富山県教育委員会によって「古文書緊急調査」が行われ、昭和五七年二月に『城端別院善徳寺史料目録』が発行された。この調査をうけ、調査報告書に記載された書跡、古文書、冊子類、合計五九六件（九三〇九点）が「城端別院善徳寺文書」として昭和五八年六月二七日に県の文化財指定を受けている。

これらの諸資料は、寺内の宝物収蔵庫や土蔵に収納されており、取扱いは、善徳寺が任命する門徒が宝物係員となつて行う。また、宝物収蔵庫には、寺の職員が常駐し、宝物の解説や古文書教室等の世話を行っている。

毎年七月下旬には虫干法会が行われ、勤行、法話とともに、これらの法宝物が虫干しを兼ねて展示され、寺内の各座敷、御殿などに調度品などの諸道具や什器類が多数陳列され拝観することができる。

そのほか、境内にある梵鐘（目録番号二四六）・唐金燈籠（二四五・二四七）については、市の文化財指定を受けている。

・「善徳寺宝物（有形民俗文化財）」指定物件一覧（二四四点）

（昭和五五年九月一二日指定）

指定目録番号	名 称	員数	本書での番号	指定目録番号	名 称	員数	本書での番号
001	挟箱	一	457	073	具足	一 式	1223
002	御化粧台	一	458-01	074	大寸筒	一	926
003	文机	一	459	075	懷紙台	一	500
004	行器	一	461	076	朝鮮唐津水指	一	927
005	野外弁当	一	462	077	大五重箱	一	501
006	曲盥	一	568-01	078	広蓋	一	502
007	御側棚	一	463	079	広蓋	一	803
008	大広蓋	一	464	080	置物（枇杷）	一	227
009	衣桁	一	465	081	茶巾盥	一	928
010	花生	一	904	082	菜籠	一	1284
011	組七輪	一	224	083	水注	一	228
012	見台	一	466	084	鉄瓶	一	229
013	脇息	一	467	085	釜	一	230
014	文具	一 式	468	086	釜	一	231
015	西洋蓋物	一	905	087	釜	一	232
016	西洋蓋物	一	906	088	釜	一	233
017	懷紙台	一	469	089	釜	一	234
018	貝合、桶	一 対	470	090	高卓	一	503
019	大机	一	471	091	花生（手桶型）	一	504
020	机	一	472	092	洋灯	一 対	
021	見台	一	473	093	飯櫃	二 箇	505
022	見台	一	474	094	御歯黒用具	一 揃	506
023	手焙り	一	475	095	蓋茶碗	五 客	929
024	大名火鉢	一	476	096	大皿	一	930
025	手文庫	一	477	097	硯板（一）	一	478
026	手文庫	一	507	098	硯板（二）	一	508
027	硯箱	一	479	099	夜学燭台	一 対	235
028	硯箱（小刀・錘・硯・墨・銀水注・筆付）	一	480	100	置物（鳳凰）	一	236
029	御守箱	一	481	101	置物（双鶴）	一	237
030	経筥	一	482-01	102	将棋盤	一	509
031	盃洗	一	1311	103	歌留多（百人一首）箱入	一 揃	510
032	高卓	一	483	104	歌留多（百人一首）箱入	一 揃	511
033	卓	一	484	105	歌留多（百人一首）箱入	一 揃	512
034	夏見台	一	800	106	鶴の卵香合	一	1275-03
035	手付盆	一	485	107	香合	一	1275-13
036	香枕	一	486	108	小簞笥	一	804
037	飯櫃	一	487	109	蓆盆	一	238
038	洗盤	一	659-02	110	水指	一	931
039	洗盤	一	659-01	111	唐獅子香炉	一	932
040	食籠	一	488	112	長柄傘（御立傘）	一	513
041	蓆器	一	489-01	113	洋徳利	一 対	933
042	懷紙台	一	490	114	火取香炉	一	934
043	火鉢	一	491	115	大名火鉢	一	514
044	曲盥	一	492	116	華道々具箱	一 式	515
045	高卓	一	801	117	御灸簞笥	一	516
046	卓	一	493	118	嗽台	一	517
047	丸盆	一	494	119	皆具組弁当	一	518
048	菓子器	一	495	120	皆具組弁当	一	519
049	速成院御膳二種	一 揃	496・497	121	御茶弁当	一	520
050	善徳寺御膳	一 揃	498	122	御茶弁当	一	521
051	風炉及び釜	一	225	123	碁盤	一	522・523
052	ギャマン蓋物	一	907	124	大盃洗	一	1310
053	鉢	三	908	125	洗盤	一	524
054	水指	一	909	126	手洗	一	525
055	水指	一	910	127	御調合台	一 揃	526
056	皿	一	911	128	払子	一	1335
057	角皿	一	912	129	高卓	一	527
058	盃	四 ケ	913	130	釣香炉（梅に鶯）	一	239
059	瓶子	一 対	914	131	釣香炉（鶴）	一	240
060	茶盤	一	915	132	波瑠細工 釣灯籠（鶴）	一	935
061	茶盤	一	916	133	切子灯籠	一	528
062	火入	一 対	917	134	台子（飾皆具揃）	一 揃	241・244・386・529
063	火皿	一	918	135	棗	二	530
064	火皿	一	920	136	建水	一	936
065	瓶子	一 対	921・922	137	灰器	一	937
066	水鉢	一	923	138	盃盤	一	938
067	蘭鉢	一	924	139	天目茶盤	一	939
068	重色紙型皿	一	925	140	織部抹茶々盤	一	940
069	置物（寿老人と鹿）	一	194	141	ギャマングラス	一	941
070	手焙り	一	226	142	ギャマングラス	一	942
071	軍配	一	1269	143	達磨火入	一	943
072	大花生	一	802	144	乗駕籠	一	698